

スタンド能力は俺 T U  
E E E するためでも  
ハーレム作るための物  
なんかじゃあな  
いッ！！

狸より狐派 ハル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある方のリクエスト作品です。

《世界を救うとか興味ない、自分だけでも幸せになればいいと思ってた。

けど・・・俺をつかまえた神はなんちゅう運命を与えてくれたのやら——  
スタンド能力手に入れたけどなんか違う、一人の男の人間讃歌が今始ま・・・りそう！  
！（ただしドロドロとしたモチ期がくる模様）》

# 目次

a	a
c	c
t	t
2	1
8	1



## a c t 1

ドララララッシユやりてえ。

そう思ったのは少なくともジョジョファンの中までは俺だけではないはず。

だってスタンドってカッコいいよな、守護霊みたいだけども戦いに向いてるものが多くて、

しかも人形に限らず虫だったり、ウイルスだったり、巨大な船になったり。

俺も目立たないスタンドでもいいからほしいってものっそい思ってるのよ。

．．．んでだ。おかしなことをいって悪いと思っちゃあいるが．．．

俺はなぜか死んだ。

．．．うん、こんな雑でごめん。死んだってこんなこと行きなり言われたら引くよね。だつてなんにも覚えてないもん、なんで死んだか、そして何者だったことさえもほぼ全部。

知っていることは．．．トイレとか外から戻ったときは手を洗うっていう．．．知識

だけなの。

ホントにこれ以上のことはわからない、ジョジョは知ってるのに。

そしてもうひとつ、おかしなこと言ってる悪いんだけど……

今俺がいるところって空の雲の上で、そして目の前に《自称女神》がいるの。

うん待って、ブラウザバックしないで、おかしなこといつてる自覚あるからこのお話を最後まで見てください。

「……もうええか?」

アツハイ

「はあ……現実逃避したい気持ちもわかるが……のう、まずはここが夢だということにしよう、ええか?」

ハア……

……この人がさつき言ってた自称女神、確かに綺麗だけど、口調がオッサンっぽいし……いきなり死んだんでって言われたよこの人に。

こっちはなにがなんだかわからないのよ……

「……よし、細かな話しはよしとするとして、今からお前さんに転生特典を与えるでえつなにそれは

「お前さんには別の世界に生まれ変わって、その世界で生活してもらうってことや。特別な能力を与えてな」

急だなあ……、それでその能力って？

「お前さんジョジョ好きやろ？だからスタンド能力をやるで」

あーはあ……

「反応が微妙やな……とりあえずこの箱から三つの紙をとつてくれ」  
神がそういういながら上に穴の空いた箱をこちらに向ける。

自由を選べんのか……というか普通一体だけじゃね？

「まあ細かいことはきにせず、お楽しみってヤツや。はよ選んでー」  
無駄にせつかちだなあ……まあいいや、とりあえず取りだそう。

がさごそ……がさごそ……

……よし、とれた。さっそく開けてみよう。

「どれどれ・・・おお、なかなかええやないかい？」

俺が当てたスタンド、

まずひとつ目が《クレイジーダイヤモンド》、高いパワーとスピードを兼ね備え、固有能力として《自分と完全に死亡した生き物以外なら完治させれる能力》をもつ人型スタンドだ。

二つ目が《クラフト・ワーク》、こちらもパワーとスピードがあるが、固有能力が《触れたものをその場に固定出来る》と言う人型スタンドだ。

つまりは空中だろうがまっ平らな壁だろうが、自分の『固定しろ』という意味さえあればそこにピタッとつくわけだ。

そして三つ目なんだが・・・《マン・イン・ザ・ミラー》と呼ばれるもの。

この能力はたしか・・・鏡のなかに人をいれることが出来る・・・だったか？よく覚えてない。

ちなみにこれも人型スタンドだ。一体はなんか他のものにしたかったな・・・



とにかくこれで三体のスタンドがそろった。あとはもうすぐ別の世界に行くのだからか……

「いや、それはないで。今からお前さんには《特訓》を受けてもらう  
えっ、特訓って？

「まあ一言で言えば……敵を感情なしにボコれる訓練や」  
いや乱暴すぎだろ表現が。

「いいからさっさとこっちこんかい、このスタカン」

と言われながら腕を引っ張られ、突如強烈な光に連れていかれる。

ちよつなにあれ!?

「訓練所や、お前をそこで一年暮らすぞ」

いやなんでそこまで時間かけなきゃいけないのよおおおお

そんな言葉を言っても助けは当然来ることもなく、そのまま引きずり込まれたのだ  
た。

---

約15年後

転生して色々あつて、中学二年生になった。転生したあとの生活？

・・・まあ、普通に暮らしたかつたさ。

・・・なんで過去形で話しているというと・・・神さんがムカつくからだ。

これだけじゃわからない？・・・そうだな、結論から言くと神が下手な特典を俺に与えたからだ。

しかもそれがスタンドでもないという・・・

その例が今俺の状態にあるんだが・・・

・・・正直に言つて胃が痛いんだよ。だつて・・・

叢雲むらくも、霞かすみ、曙あけぼの、満潮みちしほと呼ばれる四人の少女に・・・

「アンタ・・・今他ノ女ノコト考エテタデシヨ」

「コノクズ・・・！私ノスグ隣デナニ考エテルノヨ！」

「フン・・・私ナンテ魅力不足ツテ思ツテルンデシヨ」

「次他ノ女ノコト考エタラ・・・タダジャ置カナイカラ」

背もたれのない長椅子に前後左右掴まれた状態で、

光のないドス黒い瞳、いわゆる《ヤンデレ状態》でそう言い迫られてるからだ。

拝啓、前世の顔も見知らぬお母さまへ

俺、なにか悪いことしましたか？――

## act 2

転生して約14年弱、中学生で恐らく四度目の卒業式を終えて教室に戻り、先生の挨拶も区切りつき、皆が解散する。

自分の先輩に会いに行く者、そのまま帰る者、ここにまだ残る者、それぞれいたが自分は2番目の者と同じ事をした。

実はこの学校に自分の友達はいない、理由としてやはり精神的なせいだ。

自分がいくつで転生したかは、まだ思い出せてないが、少なくとも大人だったような気がする。

実際、友情だの絆だの色々と子供太刀から聞いたが、ピンとこなかったし、なにより時間の流れが早かったからだろうか。

あるテレビ番組で大人が時間の流れが早く感じるのは、トキメキが無くなってきているから、といっていたような気がするが、たぶん自分のような者がこんな目にあうのだろう。

しかし残念だ、1からやり直そうとしても結局精神的に差がありすぎて付いていけない。自分から

孤立する・・・

精神的に大人なゆえにこんなことになるのだろうか、なんだか納得がいくような、いけないような心境になった。

・・・さて、こんな悲しいことを思うのはやめにしよう。

なんせ、自分が思っているのはこの世界で起きてる事件と比べればちっぽけでバカらしいんだからなあ。

その事件っていうのが、《深海棲艦》と呼ばれる海から現れる人類の驚異だ。

写真でもある程度見たが、人形だったり、魚雷形だったり、なんかよくわからないものだったり・・・とにかく色々の種類があるらしい。

自分を転生した神いわく、転生前では《艦隊これくしょん》というゲームに出てくる敵キャラらしい。

そして、その驚異を退ける存在が《艦娘》っていう、第二次世界大戦の軍艦を擬人化した存在だ。

こちらにも、様々な艦種や個性があるらしいが、自分自身艦隊これくしょんについてよくわからないから、説明の使用がなかった。

とりあえずゲームの世界なのか、とも思ったが、神がこう言った。

「ゲームにも轟沈って言う概念があるんだけど、意味わかるか？」

・・・つまり、沈没してしまうこと？

「そう、つまり戦っている最中にそうなってしまえば？」

・・・そう、戦死である。

戦争をモチーフにしているだけであって、そういう現実味もあるところがこの世界でも適用されてしまっているようだ。

まあ、よく考えたらそうだ。そのキャラたちが使っている装備はゲームでも実弾、そんなものにかすりでもすれば怪我は当然である。

それと、あとひとつ、大事な存在が《提督》と呼ばれる艦娘を指揮する存在だ。

この存在があるかどうかで、艦娘の拠点である鎮守府が活動するか否かがわかる。当然いなかったらうまく回らないのが基本的だ。

・・・しかし、いたとしても回らないと言うパターンもあるらしいが・・・まあこれは後程に。

ん？自分は提督にならないかって？

もう一度言うが戦死もありえる。これは艦娘だけでなく、自身でもある。

なにより自分にはそこまでの責任力は持ち合わせていないからな、神にも提督になれ

だとか言われてないし、本気で国を守りたい人だけに任せるとしますか。そう言いながら自分は、行きつけのある店に向かった。

---

海の近くにある定食屋は少し昔までは、よく客が集まっていた。しかし深海棲艦が原因で減少、今では近くに住むものしか来なくなった。

しかも、近所に住んでいる人たちも前よりも少なくなってきた。これも深海棲艦たちのせいだろう。

なんでこんなことになるんだろうなあ、と思っていた店主はドアの音に気づく。

「らっしやーい」

「どうも・・・」

セーラー服に濃い紫のサイドテールの少女が入店してくる。この子は近所の話だと、どうやらの例の鎮守府の艦娘らしい。

見た目は普通っぽいんだけど、こんないたいけな少女が戦ってるなんて想像できないな。

少女はイスに座って、メニュー表を開き、選び始める。とりあえずここで質問してみ

ることに。

「なあ、お前は怖くないのか？」

「なにが？」

「海に出て戦ってるんだろ？死んでもおかしくないのに、よく出れるなくって思つて」

そういうと、こちらに少し目を合わせ、小さなため息をした後にこう言った。

「いちいち怖がつてたら、戦えないっての」

「まあ・・・そうだろうけどさ」

「・・・はつきり言つて、鎮守府に居るよりかずつとマシよ」

「えっ？どういうことだ？」

「・・・別に」

そつぽをむいてそういう少女、ケンカでもしてたのかと思つていと豚肉の生姜焼きを頼まれた。

さつそく取りかかろうとすると、

ガラツ

また誰か入つてきた。もう一度らっしやーいというと、聞き覚えのある声が聞こえた。

ちわーっす



「おう、ボウズか」

学ラン姿の常連が来た。

数年前に親とここに来てたのだが、それ以来よくここへ足を運びに来ている。こいつの家はここから車でないと、それなりに遠い場所なんだが、わざわざ自転車でここに来てくれている。

「……ん？座った気配がないな。ボウズの方を見ると、こつちに目を合わせたとたん座り始める。」

その、少女の隣にだった。

---

「こんにちは、と急に隣に座った学ランの男。なんでわざわざここに座るんだろうか、他にも席があるのに。」

「……」  
私が黙っていると、学ランはいつもの、と言った。どうやら常連らしい、私の知ったことではないけど。

「疲れたんもオ」

そう言いながら腕を枕にして頭を下げる。まったくお気楽なものね、こっちはあのクソやら戦闘やらでウンザリだつてのに。

と思つていたら・・・

そつちは出撃で苦労してるんでしょ？ 大変なこつたなあと言つてきた。

コイツ・・・私が艦娘つていうことを知つている？

すると、コイツは勝手に自己紹介をし、こつちの名前を要望してきた。

それに対して黙る私、相手にするほど暇じゃないんだけど。

するとなにかを察したのか、しばらくすると距離を置いてくれた。まったく始めつからそうしてなさいよ。

・・・しかしそこからちよつとの間が空くと——

ウーツウーツ

警報が鳴り響いた。まさか、近くに深海棲艦が!?

私は頼んだ料理のことを忘れて、急いで店を出た。もう、なんでこんなときに・・・!! とにかく急がなきゃ、

あのクソに色々言われる前に――

だが、意外にも、

そのクソのざれ言を聞く日は今日でおしまいだったことを、

そのときの私は夢にも思わなかった――

不思議な力を持った、

アイツが来たことをきっかけに――